

彫刻展示スペース

圓鏢勝三の彫刻

今期、彫刻展示スペースでは、圓鏢勝三（えんつば かつぞう／明治38・1905—平成15・2003）の彫刻作品をご紹介します。

圓鏢勝三は、広島県御調町（現・尾道市）に生まれました。京都で欄間彫刻などを手掛けた石割秀光に弟子入りした後、昭和3(1928)年に上京し、日本美術学校で学びます。昭和5(1930)年第11回帝展に《星陽》が初入選。卒業後は、澤田政廣に師事しました。昭和40(1965)年には《旅情》が日展文部大臣賞、翌年同作が日本芸術院賞を受賞。昭和63(1988)年文化勲章を受章し、翌年広島県名誉県民となりました。平成5(1993)年、郷里の御調町に圓鏢勝三彫刻美術館開館。東京駅八重洲口、広島駅、広島平和記念公園など公共彫刻も数多く手掛けました。木彫を中心としながらも、ブロンズ、テラコッタなど様々な素材を自在に扱い、バラエティに富んだ作品で広く知られます。



圓鏢勝三《星陽》
1960年 木・金属・彩色

腰と大腿部の建築的な構成などアフリカ彫刻を思わせる独特のフォルムが、「面」とこれを手にする男の象徴的なポーズと相まって、ミステリアスな雰囲気を出します。頭部と「面」、肩部と頭部のフォルムが生み出す水平と垂直のコントラストや、面取りの彫りが強調されたテクスチャなど造形的なおもしろさにもご注目ください。

また、初めて訪れたヨーロッパ旅行が制作の契機となったのが《ムーランルージュの夜》です。「ヨーロッパ旅行のおり、有名なムーランルージュに出かけ、劇場の一角より空中の姉妹が投げキッスをしながら、カンカン帽を投げるというショーを見た。その空中感を出してみたかった。」と圓鏢が言うように、曲線状の金属の支柱を用いることにより獲得された「空中感」とともに、姉妹が身に着けた華やかな衣装が相まって、ムーランルージュで繰り広げられた華麗な舞台が目に見えそうです。

このほか、13、14歳の夏に田舎で見た北斗七星にインスピレーションを受け、宇宙という雄大なテーマをもって制作した《星羅》等、ストーリー性を感じさせる、ユニークで個性豊かな圓鏢ワールドをお楽しみください。

当館主任学芸員 石川哲子

第1室

はじめに

今年、広島美術史に重要な足跡を残した画家・山路商（1903・明治36—1944・昭和19）の没後70年にあたります。山路は、昭和戦前期に前衛美術運動の旗手として活躍。鋭い感性と類まれな表現力に支えられた豊かな造形性や先進性は、新しい芸術を志す同時代の作家に強い影響を与えました。友人で詩人の坂本寿（さかもとひさし）は、戦後に出版した自著の中で山路について触れ、「広島地方の新しい芸術運動は凡てこの人の指導先達によつたと云える程で、広島画壇の中樞を成している作家の殆んどが強い影響を受けている」とその存在の大きさを伝えています。

このたびの特集では、山路の作品を中心に、交友のあった画家の作品も紹介し、山路の画業とその時代を振り返ります。

やまじしょう

広島の前衛 山路商

山路は、新潟県長岡市出身。南満州鉄道株式会社（満鉄）に勤務する父の赴任地を転々として少年期を過ごした後、1920（大正9）年に大連から広島に移住。大連では約1年間、洋画研究所に通って油絵を学び、広島移住から数年後の大正末期には、展覧会に出品するなど画壇で活動をはじめました。

山路が本格的な制作活動を開始した1920年代は、海外の先進的な芸術思潮が、ほぼ時差なく日本に紹介された時代でもありました。新しい思想や表現の吸収に積極的だった山路は、昭和初期には、フォーヴィスムを加味した躍動的で感覚に直接訴えるような線描を、昭和十年代には、夢や無意識の世界や偶然性などに注目したシュルレアリスムに傾斜した表現を、それぞれ用いていたことが作品から見て取れます。後者の作例である《犬とかたつむり》では、犬の足元から続く地面と思しき黄褐色の色面と、画面右上に不自然に覗いた青い堀との曖昧な位置関係が生む不確かな空間や、犬に比べてあまりに巨大な蝸牛など、現実世界との接点は保ちつつも、現実そのものではない新しい世界が作り出されています。

戦争へと突き進む不穏な時代に、シュルレアリスムを咀嚼した独自の表現を生み出して先鋭的な作品を描く一方、二紀会やフォルム美術協会を結成し旺盛な活動を展開した山路でしたが、1941（昭和16）年、特高に検挙。長期の拘束で体調を崩し、解放後の制作期間は限られたものでした。晩年の代表作である《自画像》は、描く対象として自らを冷徹に直視した画家の眼に映る肖像と、その鋭い視線に無防備に晒される虚飾のない自己像が重なり、絵画としての奥行きと密度を獲得した力強い作品です。



山路商《犬とかたつむり》
1937年 油彩・画布

特高による押収や、戦中・戦後の焼失、散逸等により、山路の現存作品は決して多くはありません。本特集では、近年寄贈いただいた稀少な新収蔵品も含め、山路と交友しつつ独創的な活躍を見せた同時代の画家の作品も併せて展示。苦難の時代にも絶えることのなかった彼らの表現意欲と独自の画業を模索する探究心を、それぞれの作品から感じていただけることと思います。

当館主任学芸員 藤崎 綾

第2室 和高節二

広島が生んだ作家を特集する今期、日本画からは和高節二をご紹介します。東京や京都で活躍した方が、作家にとって圧倒的に有利だった当時、その生涯の大部分を郷里向原に身を置いて活躍を続けた孤高の画家です。

和高は 1898 (明治 31) 年、現在の安芸高田市向原町に生まれました。

向原で農業に取り組みながら作画に邁進した和高は、「土の画家」と呼ばれ高く評価されていますが、その道は決して平坦ではありませんでした。

15 歳の時、画家になりたいという希望を家族に表明しましたが一同から反対されます。諦めきれなかった和高はパステルなどで独学を続けますが、体が弱かったため、18 歳の時、進学はあきらめ「絵が習える」との理由から表具店に勤めますが、絵の勉強などできないと感じ 1 年ほどでやめてしまいました。しかし、通信教育などを通じて自学自習するうち、作画の方向性は自然と日本画に向かったと言います。

1918 (大正 7) 年、節二 20 歳のこの年、チフスで母、姉、妹を一度に失います。節二自身も感染し半年にわたって自宅で療養しましたが、その間、亡くなった母や妹の絵を描き、また雅号を妹の名前にならって「光野 (ミツノ)」としたことなど、この不幸は和高のその後の生き方を左右する大きな転機になったことがうかがえます。そんな中、翌年には父の理解を得ないまま東京に出て、日本美術学院美術学校に入学、また、川端画学校にも通いました。しかし、父親ひとりを郷里に残して上京したことに後ろめたさを感じ、一か月ほどで帰郷。父の勧めるままに結婚します。普通な

ら絵の道を諦める状況ですが、逆に妻の理解を得たことで、家を父と妻に任せ上京することが可能になりました。農閑期を生かして 1 か月～2 か月、東京で勉強しては向原に帰るといった生活が始まります。

ここで紹介する《母子》や《乳のみ児》は絵と農業の両立という和高の生活スタイルが軌道に乗り始めた時期の作品です。和高の画業初期を知ることが出来る数少ない作品で、彼の子煩悩ぶりが垣間見えます。和高は、一時のように東京での勉強にあこがれる生き方ではなく、農村生活と美術の両立を、より高い次元へ引き上げようと努力するようになります。村の消防夫では内なる力強さを、村の子供では背景の処理による人物の強調を、といったように作品ごとにテーマを持って新しい試みを続けます。

そうした様々な研鑽の甲斐あってか 1940 (昭和 15) 年には紀元 2600 年奉祝展覧会に出品した《牡牛》が最高賞を受賞。一気に画壇の注目を集めました。上京し画家として独立するチャンスでしたが、和高は殺到する注文を断り、今まで通り向原での「半農半画」の生活を選びます。

戦後も和高は広島を離れることなく、地元では県美展、中央では日展への出品を通して作品発表を続け、独自の画業を重ねます。ここでご紹介する作品は、「土の画家」としてその生き方を貫いた和高らしい魅力にあふれるものばかりです。どうぞごゆっくりとご鑑賞ください。

当館主任学芸員 角田 新



和高節二 《村の子供》
1933 年 紙本彩色